氏　　名	本橋　瞳
学　位　の　種　類	博士（文学）
報　告　番　号	甲第３７５号
学位授与年月日	２０１４年 3月３１日
学位授与の要件	学位規則（昭和２８年４月１日文部省令第９号） 第４条第１項該当
学位論文題目	ロヒール・ファン・デル・ウェイデン作《七秘蹟祭壇画》研究
審　査　委　員	（主査）加藤　磨珠枝 竹原　創一 小池　寿子　（國學院大学文学研究科史学専攻教授）

Ⅰ　論文内容の要旨

論文名：ロヒール・ファン・デル・ウェイデン作《七秘蹟祭壇画》研究

（1）論文構成

序：研究史と問題の所在

第１章　作品情報

　第１節　現状と作品記述

　第２節　帰属：ロヒールと弟子

　第３節　制作年代と奉納先

第２章　聖堂内部の巨大な磔刑図

　第１節　身廊部への登場

　第２節　図像および構図の着想源

　第３節　本章のまとめ

第３章　七秘蹟図像

　第１節　歴史的変遷

　第２節　《七秘蹟祭壇画》の革新性

　第３節　七秘蹟図像分析のまとめ

第４章　各秘蹟図像

　第１節　聖体図

　第２節　洗礼図

　第３節　堅信図

　第４節　告解図

　第５節　叙階図

　第６節　結婚図

　第７節　終油図

　第８節　本章のまとめ

第５章　《七秘蹟タペストリー》の重要性

　第１節　作品情報

　第２節　研究史

第６章　《七秘蹟タペストリー》の図像分析

　第１節　叙階図

　第２節　旧約聖書の場面を伴う七秘蹟図像

　第３節　各秘蹟図像

　第４節　巻物銘文

　第５節　フィレンツェ公会議大勅書『カンターテ・ドミノ』と共通する精神

　第６節　本章のまとめ

第 7 章　聖ペテロとパウロを伴う祭壇上の聖母子図像
　第 1 節　特徴と重要性
　第 2 節　当時の祭壇上の様子
　第 3 節　教会（エクレシア）の擬人像
　第 4 節　磔刑図の卒倒する聖母との関係性
　第 5 節　「ローマ教会」としてのエクレシア
　第 6 節　本章のまとめ
第 8 章　フィレンツェ公会議を巡る歴史的状況
　第 1 節　教皇派と公会議派との対立
　第 2 節　ブルゴーニュ公フィリップの対応
　第 3 節　ジャン・シュヴローの生涯とトゥルネ司教を巡る問題
　第 4 節　大勅書『エクスルターテ・デオ』の制定と公布
　第 5 節　本章のまとめ
第 9 章　証人としての画家の肖像
　第 1 節　銀箔が顔に貼付けられた副次的人物
　第 2 節　身廊の柱の横に佇む男性：ロヒールの自画像の可能性
　第 3 節　自画像を描き込む意味
　第 4 節　本章のまとめ

結
　付録
　参考文献

（２）論文の内容要旨

本論文は、北方ルネサンスの代表的画家、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン作《七秘蹟祭壇画》（1440~1445 年頃、アントワープ王立美術館所蔵、所蔵番号 inv. 393-5）について、当時の歴史的背景および関連作品との比較にもとづき、その図像分析と解釈を行った作品研究である。従来の研究史では、絵画の様式的判断から作者の帰属問題、制作年代の推定、作品の注文主、奉納先など、作品の来歴をめぐる史実関係の解読が中心であったが、本論は当時のキリスト教社会における《七秘蹟祭壇画》の意義を、教会史をめぐる新たな視点から捉えなおそうとするものである。

全９章から構成される本論文は、まず、序において、研究史の再検討と 2007 年～2009 年に行われた大規模な作品修復の成果が踏まえられ、研究史の主な二つの問題点、すなわち、絵画の主題である「七秘蹟」図像の分析が不充分である現状、および同じ注文主がほぼ同時期に制作させた作品でありながら、これまで看過されてきた《七秘蹟タペストリー》（ニューヨークのメトロポリタン美術館、ロンドンのヴィクトリア＆アルバート美術館、グラスゴーのバーレル卿コレクションに各断片の状態で所蔵）の重要性が再確認される。これにより、研究テーマとなる図像分析の方向性と関連作との比較研究の道が示される。

第 1 章では本作品の現状と造形的特徴を詳細に記述し、作者の帰属、制作年代の妥当性について論じ、研究対象の基礎データの整理を行う。続く第 2 章は《七秘蹟祭壇画》の中央部を占める「キリストの磔刑」場面の図像分析とその解釈に取り組み、第３章では七つの秘蹟「洗礼」「堅信」「告解」「聖体」「叙階」「婚姻」「終油」の神学的理解とその絵画化における美術史的変遷を分析する。その結果、トマス・アクィナスの『信仰箇条と教会の諸秘蹟について』の神学解釈をもとに、14 世紀のイタリアで誕生した七秘蹟図像が、その後、ヨーロッパにおいて広く普及した一例として、本作の位置づけがなされる。

さらに第 4 章では、画面に描かれた各秘蹟場面と、その上の天使が持つ巻物に記された銘文との関係について詳細な分析を行い、これらの図像と 1439 年に公布されたフィレンツェ公会議大勅書『エクスルターテ・デオ』との密接な関係を指摘する。

第 5 章から第７章では、先に触れた関連作品《七秘蹟タペストリー》との比較研究に重点が置かれ、第 8 章以降は、これまでの観察から得られた造形的特徴を、当時のフランスとブルゴーニュ公国の教会政策の視点から解釈を行う。

これらの考察から、当時、教皇派と公会議派の対立により緊張状態にあったヨーロッパにおいて、教皇を支持したトゥルネ司教ジャン・シュヴローの注文による本祭壇画が、キリストの受難と神の恩恵による「七秘蹟」の神学的解釈、そしてその執行者たる「教会」の重要性を体現した貴重な作品であること、またそれが東方正教会とローマ・カトリック教会の再合同や、教皇派と公会議派との対立を調停するため開催されたフィレンツェ公会議大勅書の精神をいち早く反映した、革新的作品であることも解き明かされた。

Ⅱ　審査結果の要旨

本論文の最も大きな独自性は、北方ルネサンスを代表する画家、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン作《七秘蹟祭壇画》（1445~1450 年頃、アントワープ王立美術館所蔵、所蔵番号:inv. 393-5）のモノグラフ研究として、従来とは異なるキリスト教思想の新しい観点からアプローチしている点にある。この初期フランドル派の巨匠は、生前から国際的な名声に恵まれていたが、当時の記録から彼の真作と判定される作品はほとんどない。それゆえに、本作についても作者の帰属問題や作品の来歴の検証がこれまで研究の主流であった。これに対して本論文は、《七秘蹟祭壇画》の図像解釈およびその歴史的意義の考察に重点をおくことが大きな特長である。その方法は伝統的な図像研究に属するものであるが、ここまで精緻な分析は前例がなく高く評価される。その結果明らかとなるのは、本祭壇画が当時の宗教的精神をどのように体現しているのかという教会思想である。

たとえば、絵画の主題は、ローマ・カトリック教会において「神の隠れた神秘」を目に見えるしるしとして示すため、聖職者が執り行う七つの秘蹟の儀式（「洗礼」「堅信」「告解」「聖体」「叙階」「婚姻」「終油」）であるが、初代教会の時代から今日にいたるまでの秘蹟の概念は決して固定的なものではない。第 2 章「聖堂内部の巨大な磔刑図」と第 3 章「七秘蹟図像」、第 4 章「各秘蹟図像」では、祭壇画の中心に「キリストの磔刑」を据え、その周辺に七秘蹟すべての場面を配する構図的な特徴から、秘蹟の起源となる「受難」の意味の強調を読み取り、絵画空間の象徴性に切り込んでいった点が重要である。

次に本論文の高く評価すべき点は、研究対象を実見するために各地に足を運び、現地調査を徹底して進めたことである。本祭壇画を所蔵するアントワープ王立美術館はもちろんのこと、重要な比較作例である《七秘蹟タペストリー》についても、各断片でそれらを所蔵するニューヨークのメトロポリタン美術館、ロンドンのヴィクトリア＆アルバート美術館、グラスゴーのバーレル卿コレクションにて現状調査と資料収集を行っている。これまで断片的な保存状態がタペストリー研究の妨げとなってきたが、第 5 章「《七秘蹟タペストリー》の重要性」と第 6 章「《七秘蹟タペストリー》の図像分析」では現地調査を生かしたに緻密な復元が試みられ、その重要性を再発見したことも特筆すべき成果である。

さらなる成果として、15 世紀半ばの教会史を詳細に追いながら、絵画制作をめぐる当時の状況と、その表現内容を有機的に結びつけて論じた点があげられる。1430 年代から 40 年代にかけて、ヨーロッパのキリスト教世界は教皇派と公会議派の対立による緊張状態にあったが、絵画の注文主とされるジャン・シュヴローは、教皇支持の強引な政策によってトゥルネ司教に任命された人物であった。第 7 章「聖ペテロとパウロを伴う祭壇上の聖母子像」と第８章「フィレンツェ公会議を巡る歴史的状況」では、ローマ教会主導の公会議で制定された大勅書『エクスルターテ・デオ』と絵画との厳密な対応関係が論じられた。教会史との関係に注目しすぎるあまり、この画家の美術史位置づけをどう捉えるかについては今後の課題として残されたが、全体の成果は十分なものといえるだろう。

以上を総合して、本論文は博士学位論文としての価値を有するものと判定される。